

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow

## 九谷焼 絵付師

林美佳里氏

日本が世界に誇る繊細で美しい技を  
次代へ引き継いでいくために、  
今はただひたすら描き続けます。



Mikari Hayashi

九谷焼絵付師。1985年石川県かほく市生まれ。九谷焼技術研修所で3年間、九谷焼に関する知識と技術を学んだ後、赤絵細描の第一人者である福島武山氏に弟子入りした。

加賀百万石の華麗な文化が生んだ色絵磁器、九谷焼。石川県に生まれ育った林美佳里さんは、故郷が世界に誇る伝統工芸を次代に引き継ぐために、絵付師としての技と感性を磨いている。「絵付」とは、本焼きした素地の上に紋様などの絵柄を描く工程を指し、優美な色絵装飾が最大の魅力である九谷焼では、特に「絵付」に重きが置かれるという。

### 一 赤絵細描に興味を抱いたきっかけは？

林「焼き物の白い素地を、小さな紋様で埋め尽くしていくのが面白いと思っただけです。紋様がより小さくなって、線が細くなればなるほど」とことんやってみようという気持ちになってくるんです。その細さを見た人のリアクションを見るのも好きですね」

林さんの言葉通り、赤絵細描の線は驚くほど細い。時に1ミリの幅に7本もの線を引いて、繊細な紋様を描く。絵柄によっては、いくつもいくつも描く。使用するのは、「ペンガラ」と呼ばれる赤色の絵の具。絵柄の大部分を赤一色で美しく仕上げるためには、線の細さを極めるだけでなく、色の濃淡を一定に保つ技術も要求される。筆運びや力加減を微妙に調整しながら絵柄を描いた後、所々に金彩を施すことで「絵付」は終わる。

可憐な花から幾何学的な紋様まで、赤絵細描ではさまざまな絵柄が描かれる。その中で最も難しく、熟練した職人にしか描けないといわれているのが人物であり、林さんも師匠の福島氏が描く人物柄を見てはため息をつく。



### 二 師匠が描く人物柄の魅力は？

林「生身の人間の温かみがありますね。まるで生きて動いているように見えるんです。先生の描いた人物柄を見ていると、その人が何を思い、何をしようとしているのかさえも分かるんですよ。どうやったらそのように描けるようになるのか……まだまだ遠いですね」

そんな林さんに、師匠は「とにかく今は描くことが大切。失敗を繰り返して、笑われてもいいから、ひたすら描き続けるしか腕を上げる方法はないし、味わいも出せない」と教えている。一人前の絵付師になるには、少なくとも10年の修業が必要という。それまでは師匠を手伝いながら、来る日も来る日も絵柄を描き続ける。

休みの日も、「絵付」のことが頭から離れない。気分転換を兼ねて外出するときは、必ずデジタルカメラを携える。そして、何かを見つけてはシャッターを切る。

懐かしくも美しい  
日本の俳句  
Heartful Haiku Poems

Vol.54

短夜やまだ濡色の洗ひ髪  
嘯山



イラスト ひらいみも

なまめかしい句である。「短夜」は「夏の夜」と同じ意味で、夏は昼間の時間が長く、夜は短いというのが理由。それを時鳥さへ不満に思うとして、和歌に「暮るかと見れば明けぬる夏の夜をあかずと鳴くや山ほととぎす」(壬生忠岑・古今集・夏)と詠まれた。それで「短夜」を「明けやすし」ともいう。一方で、清少納言が「夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただひとつ、ふたつなど、ほのかにうち光りてゆくもをかし。雨など降るもをかし」(枕草子)とたたえるのは、日中が暑いだけに、夜はことさら涼しく感じられるという現実を背景にしているからだろう。なお、洗ったままで整えず、

まだ濡れている女性の髪を「洗ひ髪」と言挙げし、夏の言葉と定めるのは近代に入ってからである。作者嘯山は十八世紀後半に活躍した京都の俳人である。京都は高温多湿の盆地なので、昔は伝染病に悩まされることが少なくなかった。いま祇園祭としてにぎわいをみせる八坂神社の祭礼は、そうした疫病を、思いがけない死を迎えた人の祟りによるものと考え、災いを祓い、鎮魂する目的で始められた御霊会であった。髪を洗って清潔を心掛けるという暮らしを、こうした歴史の流れにおいてみれば、掲出句の情趣はさらに奥行きあるものになる。作品は『葎亭句集』による。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち  
「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけて日々研鑽する彼らの「ひた向きで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。

MOVIE 動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧になれます。

Web版 パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧になれます。  
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV ディスカバリーチャンネル(CS) Discovery CHANNEL  
冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」 放映中  
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

成長のために  
心掛けています



林「絵柄のアイデアを、できるだけ多く蓄えておくようにしています。そのためにもデジカメが欠かせないんですよ。私のお気に入りの花なので、いろいろな花をさまざまな角度から写真に撮り、それをスケッチに起こすことで自分なりのアイデアを増やしています」偶然見つけたアイデアの中には、思い深い作品になったものもある。弟子入りから3年目で得た、展示会への出品という大きなチャンス。その作品



の絵柄に、散歩中に会ったピンクと白の花を描いた。花びらの先が丸くくぼんでいる特徴を生かして、可愛らしい小紋に仕上げた。赤と白の使い分けにもこだわり、それまでやったことのない配色にチャレンジした。そんな意欲作の出来栄を、師匠は「自分の中に新しいスタイルがで



きつつある」と林さんの成長を評価した上で、「本当に大変なのはこれから。経験を積み重ねればもっといい具合になる」と、愛弟子にさらなる精進を求めた。師匠の言葉通り、一流と認められるまでの道のは長い。しかし、一つ一つ積み重ねた努力は、決して自分を裏切ることはないだろう。真つ直ぐに未来を見つめる瞳は、可能性という輝きに満ちている。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づけ。

取材を終えて

石川県能美市にある、師匠・福島武山氏の作業場に通いながら修業をしている林さん。福島氏に弟子入りしたのは、その人柄に惹かれたからだそう。林さんの印象通り、福島氏はとても柔和な方で、振る舞いや言葉遣いから弟子への深い愛情を垣間見ることができました。一方、林さんの目標は「先生のような職人になる」と。まさに理想の師弟関係を見た今回の取材でした。

※2010年5月取材。掲載内容は取材当時のものです。



九谷焼

17世紀の中頃に加賀藩・九谷村で作られ始めた、華やかな絵柄が特徴の色絵磁器。しかし、半世紀を過ぎたころにごつぜん姿を消す。当時の作品は「古九谷」と呼ばれ、現在では値が付けられないほどの稀少価値を誇る。それから約120年後、再び窯が開かれるとさまざまな技法や画風が誕生し、今日も伝統を受け継ぎながら常に新たな作風が生まれ続けている。